様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ６ 月　 ３ 日現在

機関番号：１７１０２
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５２０１２３

研究課題名（和文）ルネサンス教皇の即位儀礼に関する美術史学的研究

研究課題名（英文）Study on the possesso of the Renaissance popes

研究代表者
京谷　啓徳（Kyotani, Yoshinori）

九州大学・人文科学研究科（研究院）・准教授

研究者番号：７０３２２０６３

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　4,000,000円、（間接経費）　　1,200,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、ローマの教皇宮廷において執り行われたスペクタクル、とりわけ新たに就任した教皇がおこなう、ヴァチカンからラテラノ聖堂へのポッセッソの行列において、どのように美術要素が機能したのかについて解明することを目指した。教皇庁の公式記録、同時代人の日記、書簡ほかの各種記録を収集整理することにより、ポッセッソの際の沿道の装飾、凱旋門をはじめとする各種アッパラート（仮設建造物）やタブロー・ヴィヴァン（活人画）の実態を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to reconstruct the spectacle of the procession of possesso (cavalcade from Vatican to Lateran church by new elected popes), analyzing official reports of curia, diaries and letters of contemporaries. 1) Decorations of the route of possesso, 2) Ephemeral constructions (apparati in italian) set in the streets, 3) Tableaux Vivants adorned the ephemeral constructions.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：哲学・美学美術史

キーワード：教皇　即位儀礼　ポッセッソ　スペクタクル　アッパラート　凱旋門　活人画

１．研究開始当初の背景

報告者は従来、北イタリア、フェッラーラの君主エステ家を中心とする、ルネサンス期イタリアの宮廷美術に関する研究をおこなってきた。その過程で、君主称揚のメッセージ媒体として、宮殿壁画等の宮廷美術と機能を共有する宮廷祝祭や宮廷スペクタクルをも研究の射程に入れるようになった。

また研究代表者は、2010 年度学術振興会優秀研究者海外派遣事業により、ローマ大学に派遣される機会を得たが、その際に、ルネサンス期の君主ともいえるローマ教皇の宮廷における美術活動および宮廷祝祭・スペクタクルに関心を持つようになった。そして、教皇が主役となるスペクタクルとして、最大かつ最重要のものが、教皇選出後に行われるポッセッソ儀礼であったことに気付かされた。

しかし、宮殿の壁画や教会の祭壇画など恒常的に展示される一般的な美術作品とは異なり、ポッセッソの美術は、「エフィメラル（束の間）」の存在であることを本質とし、それについては従来、まさにその「エフィメラル」という特質の故、演劇・祝祭史家による研究、とりわけ Cruciani, *Teatro nel Rinascimento. Roma 1450-1550* や Fagiolo(a cura di), *La festa a Roma dal Rinascimento al 1870* 等の浩瀚な研究においてとり扱われてはいるものの、一部の研究者を除いて美術史学の枠組みの中では本格的に取り上げられることは少なかった。またそれらの演劇・祝祭史家たちの興味は、歴史的な背景や、祝祭のメッセージの分析に集中し、そこで用いられた美術の面に細やかな配慮を見せるものは少なかった。

報告者がルネサンス美術を専門とする美術史家として、ポッセッソ研究を思い立った本研究の背景は以上のようなものである。

２．研究の目的

本研究の具体的目的は、ローマの教皇宮廷において執り行われたスペクタクルにおける、美術の役割の解明を目指すものである。とりわけ新たに就任した教皇がおこなう、ヴァチカンからラテラノ教会へのポッセッソの行列において、どのように美術要素が機能したのかについて解明することを目的とする。

教皇庁側の公式記録、同時代人の日記、書簡ほかの各種記録を渉猟することにより、ポッセッソの際の沿道の装飾、仮設凱旋門をはじめとする各種アッパラート（仮設建造物）やタブロー・ヴィヴァン（活人画）の実態を明らかにしつつ、ポッセッソに関して美術史学的観点からの包括的な理解を目指す。

同時に、それらポッセッソの構成要素が中世以来の宗教祝祭・宗教行列のそれといかなる関連を有しているのか、またそこにルネサンス期に特徴的な現象である古代復興がどのような形で見出されるのかといった、多様な観点からの考察を試みた。

また以上のようなポッセッソの構成要素が、近代以降の市民社会において、ひいては明治時代以降の近代日本社会においていかに受容され、いかに変容を遂げたのかについて明らかにすることも、併せて研究の目的とした。

３．研究の方法

研究方法としては、教皇庁の公式記録、同時代の書簡、日記、旅行記、年代記、ポッセッソの様子を描いた版画、素描、あるいはアッパラートの設計図などの各種一次資料を現地図書館等において調査収集し、ポッセッソの全体像を把握し、より具体的な検討をおこなった。ポッセッソの様子については、教皇庁が発行する公式の記録が主たる記録となるが、記録されるのは教皇庁の関心事が中心となるため、その他の資料の調査も必要であった。

本研究はまず、ポッセッソが本格化したルネサンス期を研究対象として、マルティヌス５世からパウルス３世にいたるルネサンス教皇たちのそれぞれのポッセッソに関する情報を収集整理し、研究を進めた。さらにポッセッソの構成が定型化していくバロック期以降のそれについても情報を整理し、その後の研究の基礎作りも行った。

また、教皇のポッセッソが近代以降の世俗の祝祭、あるいは各種の演劇芸能にいかに影響を与えているかについても調査をおこなった。ポッセッソの構成要素でもあったタブロー・ヴィヴァンや凱旋門は、近代西洋を経て明治期以降の日本にも移入されたものであり、本研究は近代日本の西洋文化受容に関する研究にも益するところは大である。

４．研究成果

（１）ポッセッソの行程とその意義についての研究

一般に君主の入市式において、行列の通る道順は意味を有する。どの道を選択し、どの道を通らないのか。どの建築物の前を通り、どの建築物を通過しないのか。こういったこ

とにも意味がある。教皇の入市式であったともみなせるポッセッソも、そのような観点から検討するに値する。ローマ市の北西に位置するヴァチカンから、市域の対蹠点ともいえる、町の南東に位置するラテラノ聖堂への行列は、多少の逸脱はあったにせよ、基本的に定められたものであった。代々の教皇は毎回同じ行程をたどりつつ、ポッセッソの行列をおこなったのである。

ポッセッソの道順は、古代の凱旋入城に擬して、伝統的に４つの部分からなるとされた。それはすなわち「existus」「adscensu」「descentus」「adventus/ introtuis」である。それぞれの部分にはその名が示すように象徴的な意味が与えられた。本研究では、ポッセッソの行程の変遷について詳細な検討を行ったファジョーロの研究を参照しつつ、この４つの行程の意義について明らかにした。

（２）スペクタクルとしてのポッセッソ－ポッセッソの構成要素についての研究

ポッセッソは新教皇の到来をクライマックスとする大行列、華やかな沿道の装飾、凱旋門をはじめとするアッパラート（仮設建造物）、様々なかたちで提供されるタブロー・ヴィヴァン、そして教皇と各種「集団」の間で取り交わされる演劇的儀礼など、種々の要素によって構成される複合的なスペクタクルであった。

これらすべてを教皇庁式武官が企画し、教皇庁側が出資したというわけではなく、企画・出資の主体は官民様々であった。ラテラノ聖堂内での儀礼は当然ながら教皇庁の担当になるが、教皇のラテラノ聖堂到着以前の部分は、ローマの有力者たちが準備し、庶民たちも参加する部分であり、それぞれが出資するスペクタクルという形態をとって、双方向的なメッセージのやり取りが行われたのだ。劇場の観客席さながら、沿道を埋め尽くすローマ庶民の存在すらがスペクタクルの構成要素であったといってもよい。

本研究では以下、「行列」「アッパラート」「タブロー・ヴィヴァン」「演劇的儀礼」のそれぞれの観点より、ポッセッソの行列の構成要素に関する詳細な考察をおこなった。

2-a．行列は様々のことを物語る潜在性を秘めたメディアである。君主の入市式の行列はキリストのエルサレム入城やローマ皇帝の凱旋行列と重ねあわされたが、ローマ入市式たるポッセッソの騎馬行列にも同様の意義付けがおこなわれた。また君主の入市式において行列は縦のヒエラルキーを可視化した。君主を取り巻く宮廷の構造、君主を受け入れる都市のヒエラルキーが行列の形で示されたのである。ポッセッソの行列でいうならば、行列というかたちにおいて、新たな教皇を支える体制が視覚的に示されるのである。聖俗、新教皇の体制を支える構造が視覚化されるものであった。また各国の大使たちも参加するこの行列は、当時のヨーロッパの縮図でもあった。本研究では同時代の記録より行列の構造について検討した。

2-b．祝祭時に建造される仮設装飾・仮設建造物をアッパラートという。アッパラートはいわゆるハリボテ建築であり、木組みに紙や木の板を張り付け、それがあたかも石造りの本建築であるかのように彩色された。ハリボテであることによって、短期間で巨大、斬新な構造物の制作が可能となった。アッパラートはポッセッソのスペクタクル性の中心部分を担っていたといえる。ポッセッソは市当局、有力者・市民と君主の双方向の対話の場であるが、教皇へのメッセージを盛る器として有効に機能したのが、最も主要なアッパラートたる仮設凱旋門であった。

北方の入市式ではギルド毎に凱旋門を出したが、ポッセッソにおいて、凱旋門を建設したのは、新教皇とよい関係を取り結びたいと欲する有力者たちだった。またフィレンツェ出身者が教皇になる場合に限って、ローマ在住のフィレンツェ人たちが凱旋門を作った。また 1590 年、ローマ出身のグレゴリウス 14 世のためにローマ元老院によって初めてカピトリーノに仮設凱旋門が作られ、以後ローマ出身者が選出された場合はそれが踏襲された。

これらの凱旋門は教皇庁が準備するものではないため、ブルクハルトのような式武官の記録には詳細な記述はなく、日記や大使の書簡等に詳細に記述されていることが多い。またそのこと自体がポッセッソの中で凱旋門がいかに目をひくものであったかを物語っているが、これらの記録より仮設凱旋門の実態を明らかにした。

2-c．ポッセッソの演出にはしばしばタブロー・ヴィヴァン（活人画）的な趣向が用いられた。ルネサンスの宮廷祝祭におけるタブロー・ヴィヴァンの使用について報告者は別の機会に論じたことがあるが、ポッセッソにおいても、この演劇的な趣向がしばしば用いられた。アルプス以北のそれのように専用の仮設舞台を用いるものではなく、ポッセッソのタブロー・ヴィヴァンは仮設凱旋門の一部を利用するものが多かった。

タブロー・ヴィヴァンは、実際に彫刻を制作するより簡単に仕込むことができるとい

う利点もあったが、それ以上に、タブロー・ヴィヴァンを演じる人物が教皇を称える詩を朗読したり、歌を歌ったり、あるいは教皇に捧げ物をしたりすることができるといった側面から好んで用いられた。静止した彫刻に見えるものが突如動き出すことのスペクタクル的な効果が大きかったであろうことはいうまでもない。このようにアルプス以北の君主の入市式のタブロー・ヴィヴァンとの比較も交え、検討をおこなった。

2-d．君主の入市式では一般に、行程の各所で、君主と市民の対話を旨とする儀礼がおこなわれ、しばしばそれは、ある種のパフォーマンスを伴う演劇的儀礼ともいえるものであったが、ポッセッソの行列の行程においても同様のものが見られた。ポッセッソにおいて教皇との対話の相手として想定されるのは、ローマ元老院議員、貴族、地区代表、ローマ在住外国人集団、ユダヤ人などである。その中で、貴族・地区代表は行列に含まれた。各国の大使も行列に参加することでその存在を新教皇に印象付けた。元老院議員やローマに在住する外国人集団は、主に凱旋門によってメッセージを送った。よってこれらいずれへの参画も認められていなかった集団、すなわちユダヤ人が、別のかたちでポッセッソに参加することになった。新教皇はユダヤ人たちと毎回定められた手順に則り、対話を行ったのだ。それはある種、儀式とも芝居ともいえるもので、決まった科白が存在した。本研究ではこのユダヤ人の儀式が行われた場所の意義、対話の実態等について考察した。

（３）レオ 10 世のポッセッソの研究

君主が新たに権力の座に着くとき、その権威の正当性、前君主からの継続性等がメッセージとして発信されるのが一般的である。ルネサンス期の君主にはまさにその点に弱点を抱える者が多く、ビジュアル・イメージを用いて正当性や継続性を演出した事例は枚挙に暇がない。さればこそ君主即位儀礼においても、その点が重視されることがままあった。それに対して教皇のポッセッソでは、その地位の正当性や、前教皇からの継続性が謳われることは少なかった。権威継承の正当性にしばしば問題のあった世俗君主と比べ、教皇選挙で選出された教皇にとって、正当性への疑念は理論上皆無であった。それは「聖霊に導かれた」教皇選挙によって決したのであるから。また世襲ではない教皇は、前教皇からの継続性を謳う必要がなかったどころか、多くの場合前教皇を否定するかたちで教皇選挙は執り行われた。その様子が明白に見られるのがユリウス２世の死後選出されたレオ 10 世のポッセッソだった。「戦う教皇」ユリウス２世が教皇たるにもかかわらずその軍功によって称揚されたのに対し、レオ 10 世にはそれとは正反対の性格・治世が期待され、それらを謳いあげる形でポッセッソが企画されたのである。

ロレンツォ・イル・マニフィコの長男ジョヴァンニ・デ・メディチは、1513 年 2 月 20 日にレオ 10 世として教皇に選ばれた。その戴冠式は１ヵ月後の 3 月 19 日、ポッセッソはさらにそれから３週間後の 4 月 11 日に執り行われた。レオ 10 世のポッセッソに関しては多くの同時代の記録があり、仮設凱旋門も含めその詳細を知ることができた。同時代の記録の主要なものを挙げるならば、まずレオ 10 世のポッセッソの企画責任者であったといえる教皇庁式部官パリデ・デ・グラッシの日記がある。これは行列の内訳を記述するとともに、ラテラノ聖堂内での儀式についても詳述する。仮設凱旋門を中心とするアッパラートについて多くの情報を提供するのは、当時ローマに滞在していたフィレンツェ人の医師ヤーコポ・ペンニの日記である。これらを参照しながら、レオ 10 世のポッセッソの再構築を試みた。

（４）17 世紀以降のポッセッソについての研究

ルネサンス期のポッセッソは教皇ごとにヴァラエティに富み、その違いを競い合うような趣きすらあった。そしてその頂点に位置したのは先に検討したレオ 10 世のポッセッソであった。その後、レオ 10 世のポッセッソの豪華さに匹敵するポッセッソを執り行った教皇はいなかったといってもよい。

17 世紀以降のポッセッソの運命を一言でまとめるならば、スペクタクル性の逓減ということができる。特に 1590 年、グレゴリウス９世のポッセッソをテンプレートとして定型化の道をたどることになるが、その様子を relatione や descrizione の名で呼ばれる紙媒体の中に探った。

ポッセッソの構成要件の近代における受容に関しては、昭和 20 年代の日本におけるタブロー・ヴィヴァンの事例を研究した。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

京谷啓徳「新教皇のスペクタクル―ポッセッソの行列をめぐって」『西洋美術研究』18

（2014）（入稿済み、査読あり）

〔図書〕（計２件）

１．小佐野重利・京谷啓徳編『ポルディ・ペッツォーリ美術館展図録』TBS、2014（京谷啓徳「武器甲冑は何を語るか」50-55）

２．中野正昭編『少女歌劇とレビュー』森声社、2014（京谷啓徳「秦豊吉と額縁ショウ」、入稿済み）

〔その他〕（計１件）

木下直之、古谷嘉章、芳賀京子、秋山聰、京谷啓徳「スペクタクルについて考える」『西洋美術研究』18（2014）（座談会、実施済み）

６．研究組織

(1)研究代表者

京谷　啓徳（KYOTANI YOSHINORI）
九州大学・人文科学研究院・准教授
研究者番号：70322063